

サッカーで私たちに何が起きるのか

遊び、労働、市場、国民について

Kai Froeb

この翻訳について

この翻訳はAIによる機械翻訳で作成されたもので、まだ人の手による完全な校閲を経ていません。誤りを見つけられた場合は、feedback@reflexivitypress.comまでお知らせください。本書をご購入のうえ誤りをお知らせくださった方には、訂正版を電子書籍で無料でお送りします。

著者
Kai Froeb
https://kai.froeb.net

出版社
Reflexivity Press
São Martinho do Porto
カイ・フローブ版

オンライン書籍: https://reflexivitypress.com/ja/books/froeb-wm-essay
ご意見: feedback+ja.wm-essay.v0.6@reflexivitypress.com
表紙: https://reflexivitypress.com/en/about/cover-art/

刊行
2026-06-27
版 0.6
Typeset with LaTeX (LuaHBTeX, Pandoc + Eisvogel)

成立についての注記

本書は言語モデルClaude (Anthropic)を用いて執筆された。構成、内容および責任は著者に帰する。翻訳はAI言語モデルの支援を受けて行われた。作業の進め方については著者の論考を参照：https://reflexivitypress.com/ja/about/machines-that-write/

© Copyright 2026 by Reflexivity Press, São Martinho do Porto.
無断転載を禁じます。

Zero Marginal Cost License 1.3 (ZMC 1.3)

読者向けの要約

限界費用がゼロのものには、障壁があってはならない。

許可されること

- 本著作物を無料で読み、ダウンロードし、複製することができます。
- 内容を変更していない著作物を、著作者名・出典・ライセンスを表示したうえで、非営利目的でデジタル形式により再配布することができます。
- 内容を変更しない範囲で、ファイル形式を技術的に変更し、アクセシビリティのために必要な調整を行うことができます。
- 個人的・非営利目的の利用のために個々の部数を印刷し、または印刷を依頼して贈呈することができます。直接費用については、利益を上乗せせずに実費精算が可能です。
- 自身の個人的、非公開かつ非営利の利用のために翻訳を作成することができます。
- 著作物を教育・研究のために個人的に利用し、非営利の利用において学術上の基準に従って引用することができます。ただし、引用集によって著作物そのものを代替してはなりません。

条件

利用は非営利に限られます。公衆へ再配布する場合は、合理的に可能な限り著作者、著作物の出典、ライセンスを表示してください。追加の法的または技術的な制限を課してはならず、著作者や出版社による支援・推奨があるかのように装ってはなりません。

その他のすべての権利は留保されます

このライセンスは、明示された利用のみを許可します。明示されていない利用は、すでに法律で認められている場合を除き、権利者の別途の許可が必要です。

法律上の利用権限および報酬請求権は影響を受けません。 第三者の権利には別途の条件が適用される場合があります。

重要なお知らせ： この要約は理解の助けとなるためのものであり、独立したライセンス契約ではありません。拘束力を持つのは完全版の**ZMC 1.3**です：

https://reflexivitypress.com/ja/zmc/



著者について

Kai Froeb（*1963）はポルトガルの大西洋岸、サン・マルティーニョ・ド・ポルトに在住。

あなたがこの本を手に取っているということは、著者について最も重要なことはもうご存じだということです。彼はあなたに「信じてほしい」とは言いません。彼のすべての本は、そこに書かれていることが自分の思考で検証できるように構築されています。それは謙虚さの表現ではなく、構造そのものなのです。あなたの判断が本文と異なる場合、それはこの本の限界に達したか、あなたの思考の特質が可視化されたかのどちらかです。どちらも同意よりも価値があります。

この道は、長く並行して走ってきた二つの軌跡を経てきました。一つはリューネブルクの高校時代とゲールデ公民大学のサマースクールで始まりました。そこで三週間かけて一つのテキストを徹底的に読み込んだのです。その道は数学、情報科学、経営学、文化学、法学へと続きましたが、学位は意識的に取得せず、学問分野を横断する道を確保しました。もう一つは1980年、コモドールCBM 8032でワイゼンバウムのELIZAの再現版を使ったことから始まり、それが職業となりました。プログラミング、アプリケーションサポート、プロジェクト管理、トレーニング――最初は小規模ソフトウェアハウスで、次に大規模IT企業で、最後は十数年にわたり企業内委員会と労働組合で活動しました。

二つの軌跡が一体であることは、遅れて明らかになりました。四十年のソフトウェア仕事で習慣となること――構造の分解、依存関係の可視化、引っ張ったときに何が耐えられるかの検証――は、哲学的論証に必要なものと同じ手法なのです。

1998年以来、Froebは**hegel.net**を編集しています。これは11言語で利用可能な、おそらくインターネット上で最も包括的な多言語ヘーゲルリソースであり、ヘーゲルと19世紀ヘーゲル派のデジタル化オリジナル版500点以上を含む公開アーカイブを備えています。

hegel.netを通じてJohannes Heinrichsとの接触が生まれ、Froebは現在、Heinrichsの作品を出版者として刊行しています。

彼のモットーは学生時代に由来し、それ以来、有用であることが証明されています。「真理は全体である。」この言葉は、何も抑圧する必要のない統合を要求します——だからこそ、聞こえほどには実現が難しいのです。

もしこの本の中に誤りや見落としを見つけられたなら、あなたの批評はこの本に贈ることができる最も価値ある貢献です。

Zur Herkunft dieses Textes

In meiner Grundschule in Belgien gab es jeden Morgen Gymnastik. Ich habe jede Stunde darauf gewartet, dass sie vorbei ist, und bei Sportübungen geht es mir bis heute so. Beim Mannschaftssport wurde ich als Letzter gewählt. Im Fußballverein, in den meine Mutter mich anmeldete, durfte ich Torwart oder Verteidiger spielen, weil das niemand wollte; nach ein paar Monaten waren der Verein und ich uns einig. Beim Judo habe ich jahrelang meinen weißen Gürtel verteidigt. Das Beste daran war das Malzbier mit meinem Vater danach. Sportübertragungen im Fernsehen bedeuteten, dass die Zeichentrickserie ausfiel.

Später habe ich mit Kollegen Fußball geschaut, und hier im Café in Portugal tue ich es wieder. Nicht wegen des Spiels — das langweilt mich noch immer. Die Leute freuen sich, und man kommt ins Reden.

Genau das ist der Gegenstand dieses Essays. Wie bildet sich dieser Zusammenhalt? Woher kommt die Tradition, das Gefühl von Gemeinschaft, das „Wir“ eines Menschen, der keinen Ball berührt hat? Dass Politiker und Firmenchefs das benutzen, ist die kleinere Frage. Die größere ist, warum es sich benutzen lässt.

目次

サッカーが私たちにもたらすもの **1**
- ゴール 1
- 遊びと労働 1
- ファン 3
- なぜ結びつけるのか 5
- なぜサッカーなのか 7
- 裏の顔 8
- 誰が稼ぐのか 9
- 大きな「我々」 12
- 開かれたままの問い 15

サッカーが私たちにもたらすもの

ゴール

ゴールが決まる[1]。スタジアム全体が立ち上がる。見知らぬ人同士が抱き合う。何千というリビングルームで、人々がテレビに向かって叫ぶ。まるで選手たちに聞こえるかのように。翌朝、オフィスで誰かが言う。「我々が勝った」── けれども、その人はボールに触れたわけでもなく、選手の誰一人知らず、ピッチ上の出来事とは何の関わりもなかったのだ。

この「我々」はどこから来るのか。

遊びと労働

古代から、必要な労働、休息、自由な活動は区別されてきた。現代ではそれがしばしば労働と遊びの対立になる。遊びは自由に見える。なぜなら、その目的をそれ自体のうちに持つように思われるからだ。労働は不自由だ。賃金、パン、生計に向かうからだ。遊びは、強制に満ちた世界における自由の島であることになる。

ただ、それは分離できないものを分離している。サッカー選手は走り、パスを出し、シュートを打つ。その一歩一歩が目的を追求している。ボールを保持すること、味方を見つけること、ゴールを決めること。パスはプレーに役立ち、プレーはゴールに、ゴールは勝利に、勝利は順位表に役立つ。目的の階段全体が、互いの上に積み重なっている。遊びでさえ、その目的を純粋に「それ自体のうちに」持っているわけではない。

1 本稿は、クリスティアン・イバー、アゲミル・バヴァレスコ、ルティエロ・エスヴァインによる論文「Copa do Mundo – futebol, mercado e identidade nacional」（A Terra é Redonda, 2026年6月24日）に触発されている。そこから、遊びと自由、市場、国民的アイデンティティという三部構成と、いくつかのモチーフ── 単純なルールからなるグローバルな言語としてのサッカー、ファンの帰属意識の消費への変容、グローバル化の中での国家の持続 ──が得られた。本稿は別の角度から取り組む。すなわち、ファンの「我々」という意識、目的の自由ではなく目的の階梯、ファンの結束のメカニズム、そして経済的資源としての関心、という角度からである。

にもかかわらず、喜びは存在している── 動きに、成功したドリブルに、通ったパスに。しかしそれは目的の横にあるのではなく、目的の内側にある。人は目的を追求することによって喜びを持ち、目的の代わりに持つのではない。リラクゼーションのためだけに遊ぶ人も、そのことによって一つの目的── まさにリラックスすること── を追求している。

したがって、遊びと労働の違いは、一方に目的があり他方にないという点にあるのではない。目的が人生のなかでどのように固定されているか、という点にある。遊びの目的は枠づけられている。すなわち、区切られた空間のなかでのみ有効であり、その結果は限られており、全体は反復可能である。人は試合に負けても、次の土曜日には再びスタート地点に立つ。労働の目的は、現実の自己保存の圧力のもとにある── それを達成できなければ、試合ではなく、賃金、地位、生計を失う。この結果の無さこそが、遊びが遊びであり続ける限りにおいて、それを軽やかにしているのだ。プロ選手においては、労働の真剣さが遊びのなかに回帰してくる。

プロ選手は、広場の少年と同じ目的を追求する。パスから昇格へといたる同じ階段をのぼる。彼に付け加わるのは、異なる目的ではなく、階段全体の上にかぶさる他者の意志である。彼は賃金労働者だ。自分の労働力を売り、契約のもとに立ち、監督に従い、経済的圧力にさらされたクラブに仕える。彼がプレーしている間、自分が何をするかについての決定権はもはや完全に彼のものではない── 決められたときに練習し、起用された場所でプレーし、売られればクラブを移る。彼の意志は消え去らない。彼は即興し、決断し、試合を刻一刻と解釈する。しかし彼は、外から設定された枠のなかで動き、契約、クラブ、監督の目的のもとで、意欲すべきことを意欲するようになる。彼の状況が隷属民や奴隷と同じだからではない── プロ選手は法的には自由であり、しばしば富裕である── むしろ、より穏やかで自発的な形で、同じ構造的契機が反復されるからだ。すなわち、活動が他者の目的のもとに立つ、ということである。

このことはサッカー以上のものを含んでいる。負担になるのはプレーすることではなく、他者の指揮のもとでプレーすることである。同じ活動が、自分自身のものである限りは幸福にし、他者の意志が上に立つや否や、圧迫する。このことを見て取る者は、「もっと働かねばならない」という要請を、違った耳で聞くようになる。

サッカーにおいては、何かがこの厳しさを覆い隠しており、そのために像として非常に使いやすいものになっている。競争、11人の結束、共通の目標が、選手たちが自分の成果を他者のために── クラブ、その所有者、その帳簿のために── もたらしているという事実を

覆い隠す。だからこそ、チームは労働世界の手本として好んで用いられる。すなわち、従業員全体を、一丸となって共通のゴールに向かって走るチームとして想像する。すると、その下にある資本主義的形態—— 誰が誰の目的を遂行し、結果が誰のものになるのか—— は視界から消える。まさにこのことが、この像をイデオロギー的に有用にしている。

トップ選手においては、賃金労働が同時に二つの方向へ傾く。上方では、ワールドクラスの選手はそれだけ稀少であり、普通の労働者が夢にも思わないような条件を命令する。下方では、彼の経歴は短く、身体は消耗し、承認はパフォーマンスにかかっている。不調、怪我、年齢—— 昨日喝采を浴びた者は、もはや何の役割も果たさなくなる。彼の資本は身体であり、それは普通の職業人生が終わるよりも速く市場価値を失う。連帯保険がこれを支えるわけではない。高額所得者においては、金がこれを和らげる。名声の年月のうちに何百万も蓄えた者は、その後は安泰だ。厳しいのは、その下の多くの選手たち、サッカーではほとんど生活もできず、最後には何も持たずに立っている大多数のプロ選手にとってである。トップサッカーは労働世界の例外ではなく、その先鋭化なのだ。

選手たち自身も、この秩序のなかを商品や労働力のように流通している。貧しい地域—— アフリカ、ラテンアメリカ、アジアの一部—— からの才能は、早くから発見され、育成され、売買され、サッカー資本の中心地、ヨーロッパ、そして近年では最も金の集まるところへと引き寄せられる。これは他のあらゆる資本と同じ動きである。資本は、成長する場所で安価な力を探し、収益をすでに蓄積された場所へと引き寄せる。サッカーはそのなかで、国際的分業を縮図として映し出している。

ファン

ファンはプレーせず、見る—— そして、自分が影響を及ぼさない出来事に苦しみ、歓喜し、希望し、絶望する。彼を最初に支えるものは、能力への評価である。良い試合を見る者は、何かを習熟している人々を見て、それを評価することを知っている。まさに自分にはできないからこそ、それがどれほど難しいかを推測するのだ。歌手や俳優、ダンサーの能力を評価するのと同じように—— すなわち、遂行のなかに示される成果を。成功したドリブルへの拍手は、買われたものではない。

しかし、それだけではまだファンにはならない。相手の能力を評価しながら、それでも相手を我慢できないこともある。ファンは偏っている。そしてこの点に核心がある。

彼は帰属している。「私はシャルケだ」「私はアルゼンチンを応援する」── このような文は、ひとりの人間を位置づける。ファンである者は、誰かである。すなわち、その歴史、英雄、宿敵をともなう共同体の一部である。古い帰属は崩壊する── 宗派、身分、生涯の職業──、「私は誰か」という問いは開かれたままになる。クラブは一つの答えを与える。その答えはすぐに手に入り、教養を必要とせず、人をより大きな秩序のなかに位置づける。

その背後には、市場よりも古い欲求がある。自分の自由を、買い物と自分の望むものを選択することのなかに持つ、孤立した、自分で計算する人間は、もともとそう存在していたわけではない。誰もロビンソンとして生まれてはこない。人は家族のなかに生まれ、最初から関連のなかで考える。市場がまだすべてを貫いていないところでは、それがさらに明瞭に見える── そこでは個人はまず、血縁、土地、共有された歴史から自分を理解するのであって、選択する個別存在としてではない。市場はこれらの関連を、少しずつ、ばらばらの交換者たちへと解体していく── しかし、共同体への欲求はけっして解体しない。それは先鋭化させる。個々人が孤立すればするほど、帰属への渇望は強くなり、ブランド、消費者共同体、ファンサークル、スポーツ競技が、それぞれの仕方でそれに応える。

こうした共同体のなかには、現実のものもある。同僚、学友── もっとも、それらがすでに競争と金によってどれほど蝕まれているかは問われうる。他は単に想像されたものにすぎず、それゆえに非現実的ではない。それらは共通の記号に先立って存在するのではなく、記号とともに発生し、作用するのだ。確認された共通性は会話を助け、共感を生み、結びつきのきっかけを与える。同じクラブを名指す者は、もはやまったくの他人ではない。サッカーにおいては、解体のしるしがむき出しになっている。にもかかわらず、ファンは自分を他のファンと結びついていると経験し、自分の根源的に思える感情を彼らと共有する。

地元のクラブは、少なくとも理性的に根拠づけられている── それは「私の」チームなのだから、と思うかもしれない。しかし選手たち自身は我々ではない。我々の子供でもなければ、友人ですらない。同じ街でたまたま生まれた人々だ── プロクラブではそれすらもなく、世界中から高額で買われてきた。我々は彼らを知らない。

結びつけるものは、したがってチームそのものではなく、その周囲にあるものに存する。事柄が近ければ近いほど、現実の共通性の痕跡

は多い。もしかすると知人の甥がプレーしているかもしれない。そして何よりも、同僚がみな行き、オフィスで一緒に熱狂し、すでに父や祖父が同じクラブを応援していた。そして、その土地に住むすべての人々は、ともかく何かを共有している── クラブはこの共通性を可視化し、象徴する。ここには現実的な基盤がある。ある土地の人々は実際に互いに関わりあっており、クラブのなかにそれをもう一度見るのである。

このことは、単位が大きくなればなるほど変化する。小さな国家── モナコのような島国── では、市民はまだ一つの都市の住民とほとんど同じくらい多くを共有している。ドイツ、ブラジル、アメリカ、中国のような大きな国では、共通の基盤は薄くなる。代表チームが象徴するものは、もはやその下にほとんど現実の共同体を持たない。遠ざかれば遠ざかるほど、痕跡は少なくなる── 遠いスターにおいては、熱狂そのもの以外に何も現実的なものは残らない。

こうして、今日のスポーツの特異な役割が生じる。テレビ番組が二つしかなかった時代には、国民は同じ時間に同じ推理ドラマの前に座っていた。家族で見ながら、数百万人が同じ瞬間に同じ画面を見ていることを知っていた。同時性が、リビングルームを超えた共同性を生み出していた。それは崩壊した。誰もが自分のシリーズ、自分のチャンネル、自分の画面を持っている。スポーツは、数百万人がなお同時に同じものを体験する最後の場所の一つである── 最後の焚き火である。

なぜ結びつけるのか

なぜクラブは、理屈を超えるほど激しく結びつけるのか。人々が他に執着するものとの比較が役に立つ。

第一にブランド。人は自分が買うものを通じて、自分が誰であるかを示す── 車、レーベル、機器。ほとんどのブランドでは、それは記号のままである。あるスニーカーブランドを別のブランドの代わりに履くということを自分の人格の土台にする人はほとんどいない。いくつかのブランドではさらに成功する。アップルユーザー、ハーレーダヴィッドソンのライダーは、自分のブランドを自己の一部として経験し、それを守り、互いを認識する。これは広告主の夢である── 顧客から信徒団を作り出すこと。それが成就するところ、ブランドはすでにもう、ほとんどクラブである。

ファンにおいては、この信徒団はすでに存在している。そしてそれはブランドに欠けているものの上に休息している。ブランドは所有を通じて結びつける。人は自分が買うものを共有する。クラブは運命の共有を通じて結びつける。すなわち、勝利と敗北、昇格と降格、ダービー、怪我、移籍。アップルユーザーは土曜日にサムスンに負けたりはしない。ハーレーのライダーは降格しない。ブランドには顧客がいる。クラブには苦楽をともにする仲間がいる。人は集い、共に熱狂し、喜びと失望を分かち合う—— 共通の記号以上のもの、同じ信念をもった家族である。

そして、共に熱狂することは生ぬるい感情ではない。鼓動は速まり、何かがかかっており、結果は開かれている。ホラー映画やサスペンス映画と同様に、人は、観客席に座っていて本当に打撃を受けないからこそ、緊張と恐怖を楽しむ。ただファンは、映画館の客とは違って、やはり打撃を受けていると思い込む—— そして彼はそれを他の人々と共にしている。共有された不安、共有された歓呼は、彼には何か根源的なもの、ほとんど実存的なもののように思われ、それはどんな静かな一致よりも強く結びつける。

スポーツではさらに特異なことが加わる。すなわち、自分が貢献していると信じることだ。12番目の選手、ホームゲーム、自分の声援が違いを生むという信念。スタジアムではこれにはいくぶんかの真実がある。スタンドの騒音は一方を押し上げ、他方を圧迫し、ホームの利は単なる思い込みではない。しかし、多くの人が座っているテレビの前では、選手の誰一人としてその叫びを聞きはしない—— にもかかわらず、ファンはそこで劣らず熱狂し、自分を自分のチームの運命の共演者として同じように経験する。結びつきは、影響が最も小さいところで最も強い。

次に競争。アップルとウィンドウズは競争を戦わせない。それぞれの陣営が優越感を抱くが、審判も結果も決着もない。スポーツは決着をつける。固定されたルールに従い、勝者と敗者をもって。このことは情熱の独自の源泉であり、二つの側面がある。

一つは、対立そのもの、互いに力量を測ることの快楽である。それはスタジアムだけにあるのではなく、ラッパーの言葉の応酬、ユーチューバーのビーフ、政治の応酬のなかにもある。争いは人を引き込む。他方の側に反対することで、人は一方の側に属する。もう一つの側面は、リーグ運営の独特さにある。選挙は一度だけ決着し、その後は静かになる。ここでは毎週あらためて戦われ、勝ち、負け、シーズンが終わったかと思えば、すぐに次が始まる。決定的に勝つことは決してなく、完了することもない。決定的に負けることも決してなく、

諦めることもない。常に新たな緊張を生み出す機械── それゆえに、ほとんど類例のないほど永続的に結びつける。

最後に、共有された歴史。痛みを伴うものも含めて。どのクラブにもそのサーガがある。古いスタンドがまだあったとき、一緒にアウェイの試合に行き、最後の瞬間の失点による敗北を共に耐え抜いた。共に被った傷、ただし帰結のないもの── 人は試合を失うのであって、人生を失うのではない。まさにこの帰結の無さが、それらを結合剤にしている。苦い敗北を共に耐え抜いた者は、現実の苦難を耐え抜いた人々のように結ばれる。ただ代償なしに。人生そのものには、自分が登場する物語がしばしばない。それは偶然の混乱である。クラブの歴史は、欠けているものを提供する── 勝利と悲劇の物語、そのなかで自分が役割を持つものを。

なぜサッカーなのか

以上のすべてはサッカーだけに当てはまるのではない。どのスポーツにもファンがおり、それぞれのスポーツについて、当てはめれば同じことが見出される。もっとも、ある種のスポーツでは、なぜまさにそれがある国をとらえるのかについて、独自の説明が必要になる── しばしば歴史的な説明である。イングランドのクリケット、アメリカの野球、何世代にもわたって成長してきた。

サッカーはそれ以上のものである。それはその起源をはるかに超えて広がっている── ヨーロッパ、そして植民地主義の道筋に沿って南アメリカやアフリカへと。アジアの大部分やオセアニアでは、サッカーは同じ文化的優位を持たない。そこでは他のスポーツ、クリケット、野球、ラグビーが上位に立つ。しかしそこでも成長しており、大会はこれらの地域をますます取り込んでいる。なぜ一部の地域を他よりはるかに深くとらえたのかは、それ自体で検討されるべきだろう。しかしひとたび定着すれば、それは自己強化する。上位にあるものはメディアが大々的に取り上げ、スターが億万長者であるために、富という観念が遊びの観念と結びつく。しかしより深い理由は、そのアクセスのしやすさである。誰もが歌えるわけではなく、誰もがゴルフをできるわけではない── 一方は才能を必要とし、他方は場所、クラブ、金を必要とする。サッカーは広場とボールがあればいい、それだけだ。誰もが自身でプレーしたことがあり、誰もが一緒に走り、一緒に祝うことができる。自分自身の身体で知っているものは、熟達者だけが操るものとは違った仕方で評価される。

応援する相手を誰にするかについても、ここには余白がある。まずは自分の街のクラブ、自分の国の代表チーム。しかし、出自を超えて、能力そのものを手本にすることもできる── メッシ、ロナウド、かつてドイツ国外で多くの人がベッカーを応援したように。メディアが大衆の見たがるものを大々的に取り上げ、大衆が大々的に取り上げられるものを見たがるというのは、単なる操作ではなく、互いに強化しあうビジネスである。

裏の顔

ファンは声援を送ることで貢献していると思っている。スポーツ的には、彼の貢献は彼が思っているよりずっと小さく、テレビの前のそれはまったく貢献していない。彼の歓声はパスや走るコース、シュートの代わりにはならない。

にもかかわらず、彼は貢献している。ただ自分が考えているのとは別の仕方で。ファンは消費者の反対物ではなく、最も熱心な消費者である。チケット、ソーセージ、マフラー、ユニフォーム、雑誌、時には株式。そしてさらに、ファンであり熱狂することで、彼は試合への関心を呼び覚まし続ける。この関心が、何百万倍にもなって、試合を価値あるものにする。なぜなら、ファンの関心こそが、ここで売られる商品だからである。このように、スポーツ上の効果と経済上の効果は分離さえする。スタジアムで関与する前者はより稀であり、テレビの前の、スポーツ上何ももたらさない後者が、その関心によって機械全体を支えているのだ。

したがって彼は本当にクラブを助けている── 11人がより良くプレーすることによってではなく、彼が熱狂し、それによってすべてを生かす関心を生み出すことによって。それは儒教の典礼（礼）の論理である。典礼が効力を持つのは、目標を強制するからではなく、その遂行が秩序を強化するからである。同様に、ファンはファンでありそれを示すことによって、クラブを強化する。彼の遂行が貢献なのである── 彼が見ていない経済的なそれであり、彼が思っているスポーツ上のそれではない。

おそらく、彼がそれを見ないのは良いことだ。もし毎試合、自分の真の役割が支払い手のそれだと知っていたなら、熱狂は維持しがたいだろう。感じられる効果と実際の効果の乖離は偶然ではない。それは献身を純粋に保っている。

関心の利用がどこまで及ぶかは、それが今やゲームそのものをつくり変えていることに示される。今大会では、各ハーフタイムに3分間の給水休憩が設けられている。毎試合、空調の効いたスタジアムでも、穏やかな天候でもだ。こうして二つのハーフタイムが四つのクォーターになり、アメリカンスポーツのようになる。第一の理由は尊重すべきものだ。試合は北米の夏に開催され、暑さが選手を危険にさらす。しかしこの同じ休憩に、テレビ局は今や広告を挟むことができる—— 少なくとも、番組編成と国内規制が許す地域では。というのも、すべての局が利用しているわけではないからだ。サッカーがこれまで知らなかった、プレー中の完全な中断である。FIFAは、自身はそれで一銭も儲けていないと請け合う。利益は放映権保有者のものになり、米国のある放送局だけでも約2億5千万ドルの追加広告収入が見積もられているという。正確な額は、次の構造よりも重要ではない。ゲームの中断が、売却可能な放送時間に変わるのである。[2] サッカーは、45分が途切れずに流れるという点で長い間異例だった—— 途中にブロックを挿入する余地がなかった。まさにこの空いた場所が、今、埋められている。

同じ論理に属するのが、ハーフタイムの休憩である。今大会では、スーパーボウルを手本に、有名ミュージシャンを迎えた約30分のショーへと拡張された。給水休憩もステージショーも、同じ出自を持つ。ファンの誰もそれを求めていなかったし、にもかかわらず両方とも、大会直前に、議論なしに、上から導入された。これこそが本来の所見である—— 広告やショーがあることではなく、決定の方向性がそれである。試合形式は、試合や観客が要求することに合わせられるのではなく、商品化できるものに合わせられる。実体がビジネスに従い、その逆ではない。そして、いま最大の舞台で通用していることは、その後、より小さな競争においていっそう容易に通用するだろう。

誰が稼ぐのか

数字は、ささやかれる噂を醒ます。毎年の調査が、世界で最も売上の多い20クラブを捉え、その収入を三つの流れに分ける。試合日（チケット、飲食）、放映、商業（スポンサー、広告、ファン商品）。直近

2 参照：Reuters, 2026年6月24日、22分と67分の義務的な給水休憩とその公式の理由について。The Guardian, 2026年6月14日、放送局が休憩中に広告を許可する広告規則について。ただし、プレー再開30秒前までに中継に戻る場合に限る。すべての放送局がこれを利用しているわけではない（ITVやテレムンドなどは利用していない）。

では、約43パーセントが商業、38パーセントが放映、19パーセントが試合日だった。[3]

したがって、ファンがスタジアムの窓口で支払うのは、より小さな部分である。しかし二つの大きな流れは彼にかかっている。放映権にどれだけの価値があるか。それらに価値があるのは、非常に多くの人が見るからだ。放映に対して支払われるのは、その放映を巡って広告が売れるからだ。スポンサーが支払うのも同じ理由からである。ファンが見ているからだ。収入の80パーセント以上が、最終的に一つのことに帰着する── ファンがファンであることによって生み出す関心の商品化、である。

（これらの数字は、世界最大のクラブ、最もブランドと化したクラブからのものだ。地区リーグでは、ソーセージがもっと多くスポンサーがもっと少ない、別の計算になる。このメカニズムが下方にどこまで及ぶかは、それ自体で検証されるべきだろう。頂点では明白である。）

この頂点には、めったに話題にならないもう一つの主体が座している。すなわち、主催者である。競争には、それを開催し、ルールを定め、参加者を認め、場所を決め、権利を販売する者を必要とする。この唯一の者── ワールドカップについてはFIFA、オリンピックについてはIOC── は独占の上に座している。「世界選手権」の横にもう一つ別のものを据えることはできない。街の水道網の横にもう一つの水道網を据えられないのと同じである。独占を保持する者は、放映、スポンサー、チケットの価格を、ほとんど恣に設定する。

今大会では、この「恣に」が新しい形をとった。チケット価格はもはや固定ではなく、需要に応じて変動した。株式市場のように、ある試合への関心が高まれば、価格もリアルタイムでつり上がる。これは飛行機やホテルで知られるのと同じ動的価格決定であり、チケットを投機対象に近づける── その価格は、試合にかかるコストを測るのではなく、市場がその瞬間に差し出すものを測る。主催者はこうして、熱狂がまさに値する額を、まさにその瞬間に吸い上げる。もともと本来の商品であるファンの関心が、その最も強い振れの瞬間に、搾り取られるのである。

あるものを無価値から価値あるものに変える決定を誰かが単独で下すところでは、腐敗が近い── 地方政治家が、ある畑が宅地になるかどうかを決めるのと変わらない。FIFAの歴史は腐敗によって貫かれている。キックバックのシステムから、物議を醸す大会招致まで。それを安定させているメカニズムは、国際連合のそれに似ている。国連加

3 Deloitte Football Money League 2026。2024/25シーズンの売上上位20クラブの数字、合計で約124億ユーロ。

盟国よりも多くの加盟協会があり、それぞれが一票を持つ。小さな島の協会の一票は、大きなサッカー強国のそれと同じ重みを持つ。これは民主的に聞こえ、計算可能な結果を持つ。多数の小さな協会が共に多数派を形成し、彼らは上部からの支援に── グラウンド、コーチ、若手のための資金に── 依存している。この支援は現実的であり、必要である。まさにそこに、その二重の性質がある。それを分配する者は、否応なく、依存と感謝を生み出し、上部にとどまりたい者は、それを育む。すべての支援が買収なわけではない。しかし、アクセス、承認、金が一つの手を通じて流れるシステムは、庇護── 割り当てを通じた支配── に対して脆弱である。こうして、正当な援助が忠誠の手段に変わり、公然の買収が決して必要とされない。採算の取れるビジネスは、多数派が維持される限り、乱されずに済む。

このメカニズムがどのように働くかは、大会の拡大が示している。参加国数はまず48チームに拡大され、そして今大会の開催中にすら、次の64への拡大が、ヨーロッパからの批判への応答として、話題にのぼった。スポーツ的には、それを支持する論拠はほとんどない。計算は別のものである。より多くの枠は、アジア、アフリカ、中米の小さな協会にとって、より多くの参加の機会を意味する。そしてそれらの票が多数派を確保する。拡大は、参加の増大のように見え、同時に、握られた多数派を拡大する手段でもある。それは、上部に座る者には何のコストもかけない── 代償を払うのは、ますます不格好になる大会であり、そしてファンたちである。彼らにとって、それはより高くつき、より遠くで行われるものになる。

同じ権力が、そもそも誰が参加を許されるかを決める。ロシアはウクライナへの攻撃以来、あらゆる競争から排除されている。同じ年に、その軍隊が複数回にわたって外国の国境を越えて暴力を行使したアメリカ合衆国は、世界選手権を開催する。この二つの事例を同列に置かなくとも、尺度が欠けていることに気づかざるをえない。攻撃者を舞台から退場させるルールは存在しない、さもなければそれは一つの国だけに当てはまるのでは済まないからだ。ロシアはすでに孤立していたから排除できた。アメリカは主催国であり、大市場であり、メディア権力であり、大会を支える秩序の中心である── アメリカを排除することは、大会そのものを粉砕することを意味するだろう。国家の舞台に誰が立つことを許されるか、それを決めるのは法ではなく、権力である。

最も鋭い事例はイラクを巡って生じた。主催国は、大会前および大会中に、参加国に対して戦争を行った。すなわち、イランに爆弾を投下したのであって、同国の代表チームはまさにそのとき世界選手権に出場していた。その結果はスポーツ面を直撃した。選手の大部分が所

属する国内リーグは、戦争のために何ヶ月も中断された。チームは宿舎をアメリカからメキシコに移さなければならず、各試合の前後の日数分のみの短期ビザしか与えられず、そのたびに即座に帰国しなければならなかった。一部のスタッフは入国すら許されなかった。それでも大会は何事もなかったかのように続けられた。民族融和の祭典として自らを呈する競争が、主催者が参加国の一つを爆撃することを耐え忍ぶ—— これほど明瞭に、舞台を秩序づけるのは法ではなく、それを所有する権力であることを示すことはできない。

輪は閉じる。下の多くの者の献身と、上の少数の者の独占レントは一体に属している。ファンの熱狂、事柄における最も真なるものこそが、上が利潤へと変わる原料なのである。

大きな「我々」

冒頭の「我々」が残っている。オフィスの男が、自分は何もしていないのに言う、あの「我々」だ。世界選手権でそれは最も大きくなる。

そこで誰が「我々」と言うのか。同じ画面の前で、同じユニフォームを着て、同じゴールに歓喜するのは、労働者と役員、レジ係と部長医である。試合の間じゅう、一年中ずっと現実であるもの—— 階層、階級、財産の差—— が止揚されているように思われる。

サッカーは、この差異に対して三通りに関わる。一部のクラブはそれを帯びている。同じ街の二つのクラブが対峙するところでは、それは社会的に帯電する—— 上品なほう対庶民的なほう、市民的なほう対オルタナティブなほう、そしてクラブの選択が、自分が誰であり誰でないかを語る。他のクラブはそれを架橋する。工業都市のクラブの背後には、労働者から重役まで、街全体が立つ。代表チームはそれを消し去るように見える。あらゆる階層を横断して結びつける。

この共同体は、外の、現実の経済のなかには、まさに存在しない。そこでは人は分断されている—— 上と下、資本と労働、貧者と富者。スタジアムでは、外では分かれているものが一つになって現れる。軍隊におけるのと同じで、そこでもあらゆる身分が、普段はそれらを分けている戦友関係のなかに解消する。諸階級の象徴的止揚、体験のなかでは現実的であり、帰結においてはゼロに等しい。試合終了の笛の後で、各人は自分の境遇へと戻っていく。

世界選手権では、「我々」に国が加わる。代表イレブンはそれを代理する。それは単に経験される共同体であるだけでなく、全体—— 国民—— を表象する共同体である。このことによってルールが変わる。

出場するのはクラブではなく協会であり、ある国でプレーしようとする者は、その市民権を持っていなければならない。ここで論理はあからさまに裏返る。異なる出自、他の土地で生まれた選手は、プレーできるように帰化させられ、サポーターは彼がゴールを決めれば歓迎する。国民的なものに通常つきまとう排除は、けれども単純になくなるわけではない。選手が国民的な「我々」を成功裏に体現している限り、それは保留されるのである。ゴールを決める者は、この「我々」に属する。失敗する者は、突然、再びその出自を思い出されるよそ者として現れうる。

そして、代表チームが代表するものは、彼らが表現もする。それぞれのチームが、その色、紋章、マスコットを持ち、しばしば、それとわかるような独自のプレースタイルと振る舞い方を持つ。ファンはそれを続け、旗やペイントされた顔で身を飾り、お国柄をフォークロア的なものにまで押し進める—— ヴァイキングの兜、ソンブレロ、ナショナルカラーのビール。こうして、想像された統一が一夏のあいだ色鮮やかで目に見えるものとなり、国々の多様性が並んで一つの舞台に立つ。それはまた、テレビの視聴者が、普段は決して登場しない遠い国々についてついでに何かを知るきっかけでもある—— 試合と試合の間の一種の地理の授業である。

自分の国を応援することは、それだけで唯一の関係なのではない。その傍らには、特に美しくプレーするチームへの評価が立つ—— 出自とは無関係な、一つの楽しみである。これを一種の独自の栄誉として大切にする人々もいる。彼らは単に旗を振る以上のことをする。区別をし、美しいものを称賛することもできる。両者は並行しており、疑わしい場合にはやはり自分の国が勝つ。しかもその計算は、不思議といつも割り切れる。自分のチームが優勝候補を破れば、それは大きな成果。引き分ければ、名誉ある結果。負ければ、相手は強豪だったのだ。自分の国は、本当は負けることができない。

独自の共感が、小さきものに向けられる—— 単に沈没する者ではなく、それはただ滑稽なだけだ。むしろ、自分が敗れる前に、大物を大会から放り出す者に向けられる。これが衝くものはこうだ。現実の人生では、多くの人はゴリアテよりもダヴィデに近い。自分が小さき者として、大物のなかに自己を夢想するのと同じように、大物に思い知らせる小さき者のなかに自己を夢想するのである。

さらに進む者は、対戦カードに、自分がその国々について思い浮かぶもの—— その政治、歴史、世界における地位—— を負荷する。すると決勝戦は、スペイン対アルゼンチンではなく、旧植民地帝国対、台頭する自信に満ちた第三世界となる。そして、勝者を知る者は、世界がどちらの方向に向かうかを知る。もっとも、同じ試合を別の仕方

で占めることもできる。超新自由主義とトランプ寄りの国対、別の伝統をもつ国、と。どちらの解釈も同じ対戦から生まれ、結果はそれぞれ、あらかじめ持ってきた解釈を裏書きする。正反対の二つの結論の材料になるものは、そのどちらをも支えていない。どの国にも十分な歴史があり、ちょうど必要としている役を割り当てることができる。カテゴリーの選択は、望みの結果に応じてなされる。数年前、人々は水族館のタコに、二つの餌箱のどちらかを選ぶことで試合を予言させようと質問した。その選択と結果の間には何の関連もなく、誰もがそれを知っていた。政治的負荷は、構造において同じ運動である── つまり、外部から事柄に持ち込まれた結びつきであり、事柄のなかにはそれを支えるものが何もない。ただ、深刻ぶっているだけだ。11人が11人と戦う。誰が勝つかは、その日の調子、偶然、審判の決定にかかっており、政府の経済政策にあるのではない。満たされているのは、意味への欲求であり、それは試合が与えてくれるものではない。

しかし、国はクラブではない。クラブと人を結ぶのは選択だけにすぎない。人は自分の国に、実際に依存している── 法律、税金、保護、そのなかで送る生活を通じて。だから国民的同一化は、クラブへのそれほど帰結なしでは済まない。民族友好と良き敗者のヴェールの下で、やはり諸国民の競争が進行しており、それは現実的なものに触れている。階級和解のなかにすでにイデオロギー、阿片を見て取ったマルクス主義的批判は、ここにそのより先鋭な事例を見出す。試合の「我々」は、国を統治する者たちと、その政策をも包含する── しかもまさに、人々がそれに不満であるとき、あるいはそれが人々自身の利益に反しているときに。このことは、自分の国への批判がすぐに身内への泥塗りと見なされることに、また、統治者たちが好んでスタンドに座り、少しばかり彼らに染み込む試合の輝きのなかにいることに、見て取れる。

しかし、その輝きは統治者たちだけに染み込むのではない。それは普通の市民にも届く。その代表チームがいま輝いている国から来た者は、外国でそのことを話しかけられる── まるで自分自身が何かを成し遂げたかのように。自分の国が素晴らしいチームを持っている、だから自分も、その国と共に、少しばかり素晴らしい。そこから多くが生じるわけではないが、少しばかりの共感は確かに生まれ、それは見知らぬ人とのつきあいにおいて意味を持つ。

このことが何を意味するかは、二つの見方が可能だ。おそらく、象徴的和解は、現実の分裂に取り組む圧力を和らげてしまう── サッカーは数時間のあいだ平等の感覚を与え、現実の平等への渇望の先を鈍らせる。パンとサーカス。あるいは、経験された統一は、どれほど帰結がなくとも、可能的なものの予兆である── 諸階層が出会いうる

こと、分かつものが最後の言葉を持たないことへの想起である。そうだとすれば、サッカーは宥めるのではなく、目覚めさせる。どちらの見方が当たっているかは、個々に検証されるべき諸状況にかかっている。

開かれたままの問い

いくつかのことは、かすめたに過ぎない。対立への快楽、深く据わった「我々対彼ら」への欲求、その根源は開かれたままである。フーリガンの暴力は、ファンであることからではなく、その転化から説明される。人々がそれ以外に自分を有効に感じられないところでは、象徴的な対抗は現実的な対抗へと転化し、安全弁が火元になる。そして、これらすべてが、大クラブについて示されたように、角の小さなクラブにどこまで当てはまるのかという問い── そこでは、共通性の真の痕跡がより多く残っている。

サッカーは、遊びであると同時に労働であり、共同体であると同時にビジネスであり、真の感情であると同時に売り買いされる関心であり、象徴的和解であり、おそらくは現実的なそれの予兆である。ゴールのとき千の喉からあがるこの一語、「我々」のなかに、これらすべてが含まれている。それを叫ぶ者は、その後でそれを分解することができる── そして次のゴールで、やはり再び叫ぶのである。